

序章 「モモ兄貴」の謎

エリック・ロメールについて、何が知られているのだろうか。シネフィルなら、『モード家の一夜』、『クレールの膝』、『O侯爵夫人』、『満月の夜』、『夏物語』、『グレースと公爵』などといったいく本かの映画作品をとおしてロメールを認識している。より一般大衆レベルだと、この映画監督がしごくうら若い女性たち——「ロメール女優」——を撮影するのが好きであったこと、そして魅惑的であると同時に示唆的であり、苛立ちをも催させる時代の兆候として彼女らをフィルムに定着させる場合もあったということが知られている。彼はまた、ファブリス・ルキーニ、パスカル・グレゴリーなどといった、今や売れっ子となった俳優を起用した監督でもあった。海外では、ロメールはきわめてフランス的な映画製作法を体現していると思われる。

だが例えば、彼の長編映画全二十五本がフランスでは八百万

人以上の観客を動員したこと、またフランス以外の世界の国々でも数百万人の観客を惹きつけたことは知られているだろうか。エリック・ロメールは、パリのなすノビズムにちびちびと映画を提供するような、サン＝ジェルマン街仕込みの純粹培養から生み出されたのではなかった。彼の映画作品では、精密なストーリーあるいは洗練された感情が、古典的理想と両立していた。すなわち、ストーリーテリングや演出と同じく、感情表現においても、大衆の心をつかむことができるのだ。そしてだからといって、時代のある種の雰囲気や批評的あるいはアイロニカルに把握し表現することが妨げられることはなかった。

次のことも周知のことだろうか。すなわちモーリス・シエロールなる別の人物が、三十代となった折に採用したエリック・ロメールというペンネームの背後に隠れていたことを。ロメー

ルの最も古くからの友人たちが彼を呼ぶのに最後まで使っていたあのあだ名、「モモ兄貴」はこの本名に由来する。ロメールは謎を愛好していた。さらに言うなら、身を隠し、疑惑の種をまき、フットライトから離れた場所にとどまる術を知るというのが、おそらく彼の真の生きがいだっただけだ。この人物には素顔を隠すことに対するはつきりとした嗜好があり、そのことで彼はいくつもの自己同一性をまとった自らの分身をでっちあげようになった。そうして彼は自らの私生活に混乱を投げ入れることができたし、そのようにして匿名性を確保し、多くの場合は秘匿性さえ確保することができた。

第二次大戦直後、二十五歳にして彼は最初のペンネーム（ジュールペール・コルデイエ）を作り出したのだが、それはガリマール社から出版された小説の作者名としてであった。それからほどなくできた二番目のペンネーム（エリック・ロメール）は、映画に関する論考の著者として、そして最初の短編映画の監督としてであった。それからしばらく後、一九六〇年代の半ば、エリック・ロメールは職探しのために何通か履歴書を送る。そのうちの一通では、「一九二〇年四月四日ナンシー生まれ」となっている。ところが別の一通では、生地は相変わらずナンシーではあるが、「一九二三年四月四日生まれ」となっており、さらに「教師ルイ・ロメールの息子」、また「ナンシー高等学校、リオン文学部卒業」の後、「歴史・地理の高校教師」としての職歴を持つていることになっている。¹⁾

こういった記載のほとんどすべてが虚偽である。小細工する

ことへのこの嗜好のせいで、彼の正体はかき消されている。ロメールは、自らの身の上について曖昧さを保ち続ける喜びを隠すことがなかった。それで彼の私生活に関して信用に値する材料を集めることは、長らく困難をきわめた。一九八六年、フランソワ・トリュフォー宛書簡の数通をジル・ジャコブとクロード・ド・ジヴレーに手渡すとき、ロメールはド・ジヴレーの方にこう白状した。「私の論文や映画作品ではなく、私自身の人物像について問題にする時にこの書簡を活字にしたい場合は、（……）どの部分を引用するのかわからない。私の許可を得てください。なぜなら、ご承知のように、どんなに古いものであっても、私は自分の秘密をさらけ出さないようにしたいからです」²⁾

この伏せられたままの秘密に、だからといってスキャンダルや反俗的な態度、それに挑発的な政治的立場が秘められているのではなく、ましてや複雑な家庭事情だの二重の愛情生活が含まれているのでもなかった。ロメールは生涯、自分が思いついたことや何かからの引用、印象や読書の記録を何冊もの学校用のメモ帳に書きつけていたのだが、そこには「私の人生は、常にありふれたものだった。私の考えていることは、誰もが考えるようなことだ」³⁾と書かれている。素顔を隠すために仮面をつける遊戯を楽しんでいるようでいて、ロメールにはこの秘密が必要不可欠であると思えた。例えば、自分が最も称賛を集めるフランス人映画監督の一人だと母親に知らせないで、古典文学を教える高校教師であるという作り話を二十年のあいだ続け、一九七〇年に彼女が亡くなるまでそのことを信じさせることで、

ロメールは母親をどうしても守ろうとした。「そんなことを知れば、彼の母はぼっくりいったことでしょう」と、監督をよく知る者の一人が自信たっぷり断言する。元フランス語教師のモリス・シエレルは良家の息子として、よき夫として、よき父親としてきちんとした生活を送っていたのだが、エリック・ロメールはそこには決して立ち入ることはなかった。ヘリック・ロメール」としては第一級の若い女優たちや伊達者たちを引き連れ、より自由奔放であり、より世間が眉をひそめるような生活の方を好んでいたのだ。そうはいっても、よく検分するなら、エリック・ロメールの人生は輝かしい誘惑者のそれとも違っていた。ああいった魅惑的な女優たちのもとに足しげく通える秘訣を聞かれた時、彼は「絶対的な貞潔だね」という抜け目ない答えをしていた。ロメールが女優の言い分に耳を傾けるのが好きだったのは、まず映画のストーリーや脚本を彼女らにあってがうためであり、女優たちを自らの演出世界の構造の内部に巧みに取り込むためであった。

最後に、エリック・ロメールが当時随一の映画批評家・理論家の一人であったことが、また『カイエ・デュ・シネマ』誌の編集長であったことが忘れ去られている。一九五五年、彼は五部構成の宣言書「セルロイドと大理石」を執筆し、そのなかで映画が光輝に満ちていることを断言しようとした。「今日、一つの芸術が(……)あの古典主義を十全に体現している。他のすべての芸術が永遠に失ったあの健全さの輝かしさのなかにあ

る」。それは、この大芸術の正当性を打ち立てること、そして批評の役割を「美的センス」にもとづくものとして了解することである。だがこの思想家は、ジャーナリストイックなつばぜり合いや、さらには映画をめぐる論争も好んでいた。例えば、ヌーヴェル・ヴァーグ一派が偶像破壊的で場違いな、影響力のある論陣を張った文化週刊誌『アール』に、ロメールは数多くの論考を発表した。そこでのロメールは西部劇の愛好家であり、ハリウッド映画の擁護者であり、ハリウッド俳優好きであった。当時の映画界の状況を逆なでし、広く読者層を説得し驚かせようという意志のもとに行動するロメールであった……。第七芸術「映画」の思想のなかに自身の場所を確保し、自分が真の映画文筆家であったことを強調しなければならぬ。

この人物が陰の領域に留まっていたかと思つたのは、自身自身の衝動を警戒してのことであり、あらゆる行き過ぎたことを恐れたためだ。過激主義の、あるいは急進主義の立場を公にさらすことほど、彼の性格に反することはない。だからといって、ある種の価値を信じたり、ある種の原理を正しいと断じることを見なすのはしなかつた。それに彼は、思想や芸術、政治についての議論に自ら喜んで加わるところもあつた。自分のことを保守的であると言つて決してばばらなかつたが、それは過去のなかに現在のための、さらには未来のための発想源を見ていたからだ。そして彼はカトリック同様、王党派への親近感を長らく公言してきた。だからといってエリック・ロメールは、独断的な人物ではなかつた。他者への好奇心、寛容の精神、洗練

された反論と論争にさえ愛着を持つことが彼の精神状態を最もうまく規定する。伝統と保守とを旨とするこの人物は、とりわけエコロジ的な闘争における議論に理解を示し、ますます持論として取り入れていることを隠しだてしなかつた。このことは彼にとっては、一貫性を欠いたことではいささかもなかつた。

二〇一〇年六月、エリック・ロメールが亡くなつてから五カ月後のこと、本人の遺志に従い、彼が書きためていた資料は遺族の手でIMEC（現代出版史資料館）に収蔵されることになつた。その九十年の生涯で残されたのはほぼ百四十箱にもおよぶ資料、二万枚以上の紙葉である。モリス・シュレル／エリック・ロメールの並行する人生のそれぞれを、つまり同時に教師であり、批評家、シネフィルであり、作家、映画監督であつた彼の経歴を本書でたどり直すことができたのは、この寄贈資料のおかげである。それに加え、ロメールが実地に学んできた主たる事柄、読書内容、参考文献、書簡、そしてロメールの未知の部分を知る上で示唆的である彼の関心の中心といつたものもたどることができた。

ロメール寄贈資料をもとにして明らかになるこの芸術家の多様な活動の中核をなすのは、著作と映画製作という彼の仕事である。一九四〇年代になるや、物語や中編小説、短かめの脚本の草稿が見付け出されるのだが、それは後に映画脚本の仕事において繰り返し返されることになる作家活動が、すでに確固としてなされていたことを証しする。事実、ロメールが監督した連作群（《六つの教訓話》、《喜劇と格言劇》）をはじめとする数

多くの映画作品が、それより十五年あるいは二十年前に、時として三十年前に書きあげられていた文学的著作に材をとっている。その事実によつて解明の光が投げかけられ、ロメール映画生成の系譜は大幅に書きかえられることになつた。

この寄贈資料は、ロメールの仕事の発端からその後の展開まで、すなわち着想、執筆、撮影、俳優への指示といったことから、映画作品のそれぞれの受容までを再構成する可能性もたらしめてくれる。このようにして、ロメールの長編映画の製作の具体的な様相が明らかにされるのだ。そうした資料調査の過程で、ロメールが早くも一九五二年に最初の短編映画、『ちっちゃな模範的少女』を手がけ、撮影していたことが発見された。セギール伯爵夫人（註）の小説をもとにしたこの映画は、これ以降はヌーヴェル・ヴァーグの第一作目と見なされるべきである。

この資料の宝庫を参照するのに加えて、エリック・ロメールと活動をともにすることなつた広範囲の交友関係や協力者、技術者、芸術家あるいは知識人と実際に会つて話を聞くよう努めた。今回の伝記的調査のため特別に行つた対談では、百人ほどの関係者に協力してもらつた。記録文書や関連する類書のもたらしめてくれた知見を確固としたものにするこういった証言があつたからこそ、ロメールのたどつてきた経歴の並はずれた多様性を理解できるようになつた。その経歴には中編小説と長編小説、演劇作品、評論が含まれるだけでなく、映画、文学、音楽評論もまじっている。偉大な映画監督としてのロメールだけでなく、写真家であつたりイラストレーターであつたり、また衣

装や大道具の立案者、あるいは自らの映画のための歌と音楽の作曲家としてのロメールもいるのだ……。かくして、これぞまさしく〈一人オーケストラ〉^(註)といった肖像が立ち現れるのが見て取れるであろう。それは自らの各々の映画作品によって、また自らの映画の計画を絶えず育んでくれた文学作品、絵画作品、音楽作品、あるいは演劇作品によって引き起こされた遭遇に創

作意欲をかき立てられながら、自らの完全な自立性に配慮していた人物の肖像である。

そう、本書で読まれようとしているのはこういったことだ。それは謎の人物としての、複雑な個性の持ち主としての、そして完全な芸術家としてのエリック・ロメールである。